

小麦生産の基本技術

令和7年10月1日
大里農林振興センター

小麦の栽培暦

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	備考
生育ステージ	○ (は種) 出芽				茎立ち	出穂期 穂揃期	糊熟期	× 成熟期 収穫期	R7年産小麦の振り返り 11月中旬頃までの生育は良好であったが、11月下旬以降のは種では乾燥により出芽が遅れ、春先の繁茂量が不足することでコアカザを中心とした雑草競合で生育が劣る事例が散見された。収穫期がやや遅かったが品質は良好であった。
各種作業	は種 鎮圧 土壌処理 除草剤	麦踏み	麦踏み	麦踏み	茎葉処理 除草剤	追肥	赤かび病 防除	収穫製 ・乾燥	

栽培のポイント

1 確認作業

- ・著しい排水不良ほ場は作付を避ける。
- ・ほ場ごとに品種の作付マップを作成しておく。

2 排水対策

- ・小麦は栽培期間を通して湿害に弱いため、排水対策を行う。
- ・排水の悪いほ場では弾丸暗きょやサブソイラを引いて耕盤を壊し、ほ場の透水性をよくする。
- ・地表の排水性を高めるために、ほ場周囲及びほ場内に明きょを設置し、必ず排水口と連結する。

3 土づくり・施肥

- ・砕土は細かくする。砕土が粗いと苗立ちが低下し、除草剤の効果が落ちるため、砕土率（直径2cm以下の小さい土塊の割合）が6～7割になるよう、丁寧に砕土を行う。
- ・耕うんは1回耕よりも2回耕の方で砕土率が上がり、除草剤の効果が安定する。
- ・土壌が酸性に傾いているほ場は石灰類を施用し、土壌 pH6.0～6.5 を目標に矯正する。
- ・基肥は窒素成分でさとのそら 6kg/10a、あやひかり 8kg/10a を基本とし、地力に応じて加減する。

4 は種量・は種時期

は種時期別の生育の特徴と栽培上の注意点を以下に示す。

- ・早め（11月1日～15日頃）
は種量は5～6kg/10a。秋の生育量が大きいため、春先の雑草競合に強い。生育期間が長く、追肥不足だと減収しやすい。登熟期の日射が少なく、収量の最大値は高くないが、安定している。収穫が早いため、自家乾燥農家向け。は種が地域平均よりも早すぎると出穂後に集中的な鳥害を受ける可能性がある。
- ・標準的（11月15日～30日頃）
は種量は6～7kg/10a。バランスの取れたいわゆる適期。この時期になるべく多くのほ場をは種するように計画する。
- ・遅め（11月30日～12月15日頃）
は種量は7～9kg/10a。生育量が不足しやすいため、は種量を増やす。特に冬季が乾燥すると出芽の遅れやムラにつながり、春先の雑草競合に負けやすい。生育量確保や除草効果がやや不安定な作期。ただし登熟期の日射が多く、収量の最大値は高い。

その他

- ・は種深度は3cmを目安とする。水分が多いほ場は浅まきとし、乾燥しているほ場はやや深まきかつ鎮圧する。

5 雑草防除

- ・は種後土壌処理剤を基本とし、は種翌日までに散布する。
- ・は種後除草剤散布前に麦踏みローラー等で土壌を鎮圧すると、土壌の凹凸が少なくなり除草剤の効果が安定しやすい。
- ・生育期茎葉処理剤については、雑草が大きくなってからでは効果が低いため、2月下旬～3月上旬頃にほ場内に入って条間を確認し、雑草の芽生えが多い場合は早めに散布する。
- ・カラスノエンドウ、カラスムギ、ネズミムギ（イタリアンライグラス）は難防除雑草なので発生した場合は手取り除草で確実に除去する。法面管理と初期段階の抜き取りを徹底する。
- ・栽培終盤には秋の土壌処理剤の効果が切れてヒエが発生する。次作が水稻の場合、2～3月にトレファノサイド乳剤を処理してヒエの発生を防ぐ、または麦収穫後耕うん前にラウンドアップでヒエを枯らすなどしてから代かきすると、水稻でのヒエ蔓延を減らす効果が期待できる

6 麦踏み

- ・3葉目が見えたら、年内に1回、その後は茎立ち前（3月中旬頃）までに2週間程度間隔をあけて2回、合計3回程度行う。
- ・麦踏みは徒長や無効分げつを抑えて倒伏や凍霜害を防ぐ。

7 追肥

- ・追肥時期は茎立ち直前とする。（は種早め：3月10日頃、標準的：3月15日頃 遅め：3月20日頃）
- ・追肥量は窒素成分でさとのそら 4kg/10a、あやひかり 2kg/10a を基本とし、地力に応じて加減する。また早めのは種では多めに、遅めのは種では少なめにする。
- ・一発肥料を使用した場合は、葉色が特に低下している場合に、3月上旬中に窒素成分 1～2kg/10a を施用する。

8 病害対策

- ・赤かび病は出穂期7～10日後（開花期）に防除する。
- ・注意報等が出たら追加防除を行う。

9 収穫

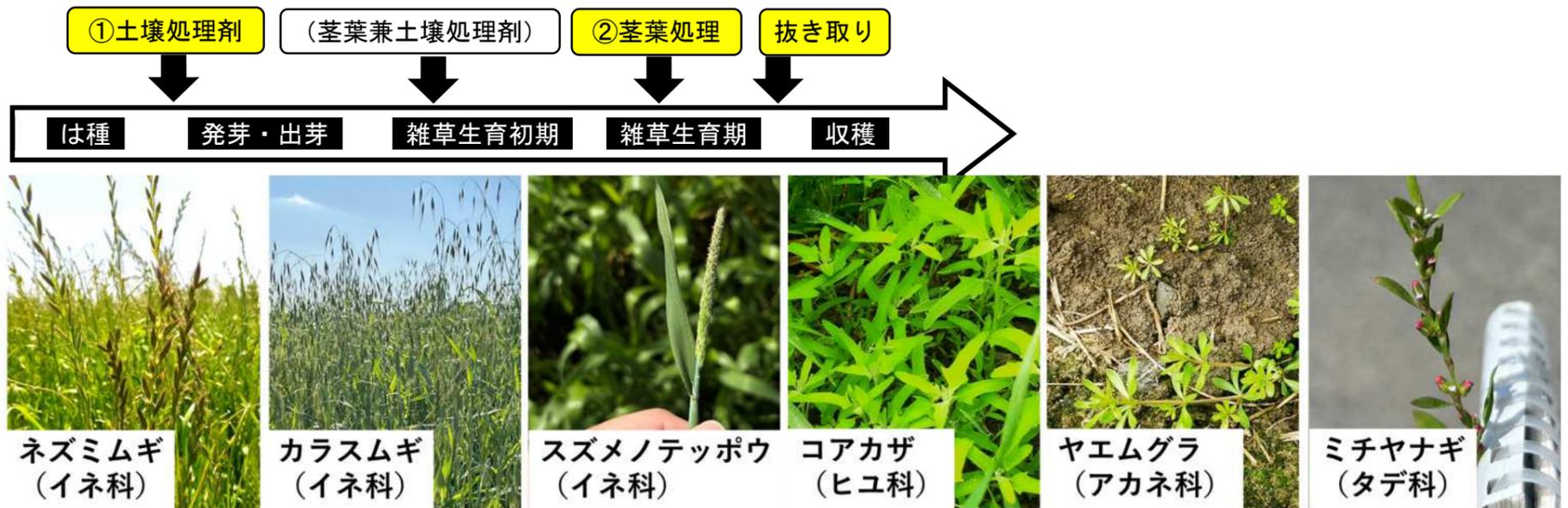
- ・穀粒水分 25%以下で収穫する。

10 乾燥・調製

- ・収穫後はタンク内に放置せず、直ちに乾燥を開始する。
- ・乾燥機の張り込み量は少ないと過乾燥になり易く、損傷粒が発生する場合があるため、最小張り込み量以上で使用する。
- ・仕上げの穀粒水分は 12.5%以下とする。

雑草防除について <補足>

- ・ほ場ごとに優占雑草や麦類の生育ステージを考慮し、適切に防除を行う。
- ・カラスノエンドウ等、グレーダーで選別できない雑草が残った場合には、収穫物に種子が混入しないよう、収穫前に抜き取る。



近年、冬季乾燥により小麦の生育が停滞し、春の土壌処理剤の効果が切れる頃に雑草に負けてしまう事例が多くみられる。まき遅れて2月の時点で条間がほとんど覆われていないほ場では、生育期に使用可能な土壌処理剤であるトレファノサイドを散布するとその後の雑草の蔓延を抑制できる（ただし、アブラナ科やキク科には効果が乏しい）。また、トレファノサイドはヒエにも効果が期待できる。ヒエは小麦では問題にならないが、小麦栽培時に発生したヒエが代かき時に残存すると水稻の一発剤の効果が小さく蔓延しやすい。小麦栽培時にヒエを抑制しておくことで水稻栽培時の雑草発生量を減らすことができる。

麦類の発生雑草種に合わせたおすすめ防除体系

（石灰窒素を施用した場合、基肥は省略または半分未満に減らす）

問題雑草	8月	9月	10月	11月 (土壌処理剤)	12月	1月	2月 (土壌処理剤) (生育期再処理)	3月 (茎葉処理剤)
カラスムギ/ ネズミムギ/ スズメノテッポウ	石灰窒素50kg/10a 施用後耕うん (もしくは水稻栽培)			シナジオ			トレファノサイド	ハーモニー (効果は限定的)
カラスノエンドウ /スカシタゴボウ				リベレーター				アクチノール またはMCPソーダ塩
ヤエムグラ/ ミチヤナギ/ホトケノザ				ムギレンジャー			トレファノサイド	エコパート
シロザ/コアカザ				クリアターン			トレファノサイド	ハーモニー またはMCPソーダ塩
ヤグルマギク/ナズナ				ダイロン				バサグラン

MCP ソーダ塩は、幼穂形成期以外の使用は薬害による減収につながるため使用時期には特に注意する。

（は種早め：2月中下旬頃、標準的：2月下旬頃 遅め：3月上旬頃）

上図は、各農薬メーカーの技術資料や、国内外の自治体の指導資料を参考に作成したものです。

毎年同じ除草剤を使っていると、特定の雑草が優占したり、除草剤への抵抗性を持った雑草が発生したりします。発生雑草を確認し、年ごとに異なる剤を選択して雑草の種子を作らせないようなほ場管理を目指しましょう。

農薬を使用する際は、必ず使用農薬のラベルを確認して適用や用法を守り、周辺作物への飛散防止に努めましょう。

資材別窒素

施用量早見表

肥料銘柄	施用量(kg/10a)			
	窒素2kg	窒素4kg	窒素6kg	窒素8kg
オール14(14%)	14	29	43	57
NK肥料17-0-17(17%)	12	24	35	47
硫安(21%)	10	19	29	38
尿素(46%)	4	9	13	17
さとのそら追肥専用(20%)	10	20	30	40